

蝶になりたい小泉八雲——芥川龍之介「或自警団員の言葉」を視座として

小谷 瑛輔（富山大学）

1 小泉八雲の蝶変身願望

小泉八雲は没後、日本の作家達にどのように読まれ、捉えられたのか。この問いについては、十分に研究されているようでもあり、またほとんど分かっていないとも言える。

たとえば、芥川龍之介は有名なアフォリズム「侏儒の言葉¹」の中の「或自警団員の言葉²」で次のように書いている。

小泉八雲は人間よりも蝶になりたいと云つたさうである。蝶——と云へばあの蟻を見給へ。もし幸福と云ふことを苦痛の少ないことのみとすれば、蟻も亦我我よりは幸福であらう。けれども我我人間は蟻の知らぬ快樂をも心得てゐる。蟻は破産や失恋の為に自殺をする患はないかも知れぬ。が、我我と同じやうに楽しい希望を持ち得るであらうか？ 僕は未だに覚えてゐる。月明りの仄めいた洛陽の廢都に、李太白の詩の一行さへ知らぬ無数の蟻の群を憐れんだことを！

ここでさりげなく登場するのが「小泉八雲は人間よりも蝶になりたいと云つたさうである」という一文である。小泉八雲のどのような言葉が後世に記憶されていったのかは、たとえばこうしたところからうかがうことができるだろう。しかし、この小泉八雲像は一体何をもとにしてどのように読まれたものなのか、ということを仔細に検討するならば、実は問題含みなものであることが分かる。細かい説明の前に先取りして言えば、この八雲の発言は、いまだに出典が判明していないのである。

「侏儒の言葉³」は何度も再録され、新たに注釈が付けられる機会も多かった作品だが、この節についてまだ分からない点が多い。その一つの理由としては、この節の持つ特殊な事情がある。

この節は大正12年11月に『文藝春秋』に掲載されているが、芥川の没後、初めて『侏儒の言葉』に単行本化されるに際して削除されている。この事情については、単行本『侏儒の言葉』に挟まれた別紙に「一、「侏儒の言葉」の本文は他の著作集と同じく、雑誌「文藝春秋」の切り抜きに著者自身手を加へたものに拠つた。その為、——「神秘主義」他二、三のものが省かれることになつたのである」と説明されており、芥川の意図の反映によるものとされている。ただし、この「雑誌「文藝春秋」の切り抜きに著者自身手を加へたもの」自体は現在所在が不明となっており、確認することができない。ともかく、この節は初収単行本から省かれ、それが作者の意図によるものであるとされたために、これを省くという方針を踏襲したものがその後の再録本には多く、やや大げさに言えば、「幻の節」となってきたのである。研究史の整理も兼ねて、まずは芥川龍之介のこの文章がどのように一般読者に受容されてきたのか、どのように研究されてきたのかということ詳しく見ておきたい。

2 「侏儒の言葉」の幻の節

「侏儒の言葉」に注釈を付ける仕事を継続的に担ってきたのは吉田精一である。昭和33年の『芥川龍之介全集⁵⁾』、昭和38年の『近代文学注釈大系 芥川龍之介⁶⁾』、昭和41年の『現代日本文学館20 芥川龍之介⁷⁾』と、吉田精一が少しずつ手を入れて注釈の精度を上げていく中で、「或自警団員の言葉」など初収単行本で省かれた節は掲載されることがなく、したがって注釈においても度外視されていた。昭和41年の文庫版『羅生門・鼻・侏儒の言葉⁸⁾』など、この時期に出ている他の注釈付きの本でも同様に省略された節は収録されていない。

潮目が変わったのは昭和43年の文庫版『侏儒の言葉・西方の人⁹⁾』である。この本の注釈は無署名だが、解説が吉田精一であり、これまでに本作の注釈を担当してきたのが専ら吉田精一であったことを考えると、これも吉田精一の注釈を基本にしたと見てよいだろう。この文庫では、初収単行本省略分の節を「補輯」として収録し、「或自警団員の言葉」もここで多くの読者を得ることになった。ただし、ここでは「補輯」に収められた節には一切注釈が付けられておらず、文庫全体のコンセプトから見れば不完全な形での収録となっていた。このことも、この文庫の注釈が吉田精一の従来のものに拠っているという推測を裏付けるだろう。

この文庫から1年少し経った後、『日本近代文学大系 第38巻 芥川龍之介集¹⁰⁾』が出る。これもやはり吉田精一が注釈を担当しているが、補注で「前年一二月号には「或自警団員の言葉」があったがこれは単行本では削除された」と注意を促している。

吉田精一が「或自警団員の言葉」の節に注釈を付けるのは、管見の限りでは昭和46年の『芥川龍之介全集 第五巻¹¹⁾』が最初である。ここでは、上記の昭和43年の文庫版と同じく、初収単行本省略分の節を「補輯」として収録しており、簡単な注釈も付いている。ただし、「小泉八雲は人間よりも蝶になりたいと云つたさうである」というエピソードの出典については注釈されていない。

一つ前の『日本近代文学大系 第38巻 芥川龍之介集』で、吉田精一は巻末に「注釈者あとがき」を掲載しており、そこで「「侏儒の言葉」や「西方の人」には、ことばの注釈というよりも、事実の由来その他について究めていない部分がある。それらについては後考を待つとともに、世の博識からの示唆を期待したく思っている」と書いている。こうしたエピソードについて調べ切れていないことを、吉田精一は心残りに思っていたのである。

平成に入ると、新たな注釈者が登場する。まず一人は、平成7年の文庫版『侏儒の言葉・西方の人¹²⁾』で注釈を担当した神田由美子である。この本では、「或自警団員の言葉」など初収単行本省略分の節も、初出『文藝春秋』で掲載された順に並べられており、当時の読者と同じ順番で読むことができるようになっている。この節にも詳しく注釈が加えられているが、「小泉八雲は人間よりも蝶になりたいと云つたさうである」の一文については特に注釈されていない。出典が見付からなかったためであろうと思われる。

続いて、平成8年に岩波版『芥川龍之介全集 第十三巻¹³⁾』が刊行され、ここには山田俊二が担当した注釈が掲載されている。管見の限り、件の一文に注釈が加えられたのはこれが初めてのもののだが、「人間より蝶になりたい」の出典は不明。ただし、『骨董』（一九〇一）所収の「餓鬼」では、「蟬か蜻蛉の生涯にせめて生れ変わりたい」とある」と書かれている。これは、昆虫の種類の違い

もあるが、文脈的にはさらにずれる点もある。原書の KOTTO¹⁴でもう少し広く文脈を確認してみると、この箇所は “In fact I have not been able to convince myself that it is really an inestimable privilege to be reborn a human being. And if the thinking of this thought, and the act of writing it down, must inevitably affect my next rebirth, then let me hope that the state to which I am destined will not be worse than that of a cicada or of a dragon-fly;” となっている。この箇所についての『小泉八雲作品集 第十巻¹⁵』の訳を挙げておくと「じっさい、わたくしは、自分がもう一度人間に生まれ変わることをのみを、この上もない恩沢とばかりは考えられない。もしも、かく考える思と、かく書く行とが、わたくしの来世における再生の因縁をつくるものであったら、やがて来世に定められているわたくしの次の生涯は、せめて蟬か蜻蛉の生涯に生まれ変りたいものである」である。まず、変身願望ではなく、来世の生まれ変わりの話題であるという違いが一つにはある。日本語訳で一部だけ切り出せば、まるで人間よりも昆虫になりたいというニュアンスがあるようにも見えるが、“not be worse than” とあるように、蟬や蜻蛉は、あくまで許容範囲の下限として語られているに過ぎない。人間に生まれ変わることについては “inestimable privilege” すなわち「この上もない特権」であるということが否定されているだけで、蟬や蜻蛉に劣ると書かれているわけではない点にも注意しておきたい。

では、もしこれが出典でないとすれば、このエピソードの出典は何だろうか。稿者は、この一文を含む、「侏儒の言葉」全体について注釈を付けたことがある。文藝春秋が、90周年記念、芥川賞150回記念、文春文庫40周年記念として企画した文庫版『侏儒の言葉¹⁶』である。しかし、「人間より蝶になりたい」についてはやはり最後まで出典が判明しなかった。この注釈では、昆虫の種類の一致を考えて、上記とは別の候補として「蝶になる夢については、『怪談』"Kwaidan" (1904) 中の「蝶」"butterflies"などに記されている」という例を挙げたが、ここでの「夢」は理想や目標の意味ではなく寝ているときに見る夢のことであって、これも出典として確度が高いものとは必ずしも思われない。

この問題については、続く「僕は未だに覚えてゐる。月明りの仄めいた洛陽の廢都に、李太白の詩の一行さへ知らぬ無数の蟻の群を憐れんだことを！」という一節と合わせて考える必要もあろう。というのも、実はこの李白のエピソードも出典が不明だからである。こちらもこれまでほとんど注釈されてこなかった箇所であるが、稿者は「李白にこのような内容を直接詠った漢詩はない。ただし、白龍が鯨に手紙を書いて、蟻に噛まれることを忠告するという「枯魚過河泣」という詩があるが、これについての佐藤春夫(1892—1964)の「李太白」(1918)中の解釈がここでのニュアンスに近い。佐藤春夫は芥川、谷崎潤一郎(1886—1965)とともに当時を代表する中国趣味の作家で、互いに中国文学の情報を交換していた。佐藤春夫「李太白」においては、魚になった李白が詩才を持った自らを魚になった白龍やその友人である鯨になぞらえており、鯨の偉大さを分らない蟻が鯨を噛むという構図でこの詩が説明されている。また鯨は、李白の水死伝説において李白が昇天する際に乗る動物ともされる」と注釈した。ただし、こちらでも直接の出典というよりも、多少の記憶違いあるいは変形を前提としなければ説明の付かない例でしかない。要するに、この段落のエピソードはいずれも出典不明のものばかりで構成されているのである。

さらに言えば、続く段落で芥川は「しかしショオープンハウエルは、——まあ、哲学はやめにし給へ」と、3人目の著名人の話としてショーペンハウエルのエピソードを引用しようとして実際には何も引用せずに節を閉じるのだが、これも合わせて、「或自警団員の言葉」は、出典があるかのようにならぬ話を挙げ、とうとう出典の確認できる話が全く出ないまま終わるといった奇妙な構成になっていることが分かる。

こう見てみると、この節は、芥川が具体的に資料を見ながら書いた節ではないという可能性が濃厚になっている。すなわち、創作しているか、あるいは震災で資料が手元にない中で、曖昧な記憶や印象を頼りに書いているということだ。

では、ここに登場する小泉八雲、李白、ショーペンハウエルといった固有名には意味はないのだろうか。これについては、むしろ逆ではないかと考えられる。芥川が資料をもとにせず固有名を挙げたのだとすれば、この文章は芥川にとって彼らがどのような存在であったかということをより強く反映していることになるからだ。

3 関東大震災と芥川龍之介

では、これらの固有名は、なぜここで召還されることになったのだろうか。これを考えるために、改めてこの節の内容を確認しておきたい。

まず「或自警団員の言葉」という節のタイトルになっている「自警団」とは、関東大震災のときに社会主義者や朝鮮人による暴動の流言が発生したとき、それに対応して結成されたものである。この自警団によって多くの朝鮮人が虐殺されたことはよく知られた歴史的事実であるが、芥川龍之介はこの事件について、他の文章でも触れている。たとえば「大震雑記¹⁷⁾」には以下のような一節がある。

僕は善良なる市民である。しかし僕の所見によれば、菊池寛はこの資格に乏しい。

戒厳令の布かれた後、僕は巻煙草を啣へたまま、菊池と雑談を交換してゐた。尤も雑談とは云ふものの、地震以外の話の出た訣ではない。その内に僕は大火の原因は〇〇〇〇〇〇〇〇さうだと云つた。すると菊池は眉を挙げながら、「嘘だよ、君」と一喝した。僕は勿論さう云はれて見れば、「ぢや嘘だらう」と云ふ外はなかつた。しかし次手にもう一度、何でも〇〇〇〇はボルシェヴィツキの手先ださうだと云つた。菊池は今度も眉を挙げると、「嘘さ、君、そんなことは」と叱りつけた。僕は又「へええ、それも嘘か」と忽ち自説(?)を撤回した。

再び僕の所見によれば、善良なる市民と云ふものはボルシェヴィツキと〇〇〇〇との陰謀の存在を信ずるものである。もし万一信じられぬ場合は、少くとも信じてゐるらしい顔つきを装はねばならぬものである。けれども野蛮なる菊池寛は信じもしなければ信じる真似もしない。これは完全に善良なる市民の資格を放棄したとみるべきである。善良なる市民たると同時に勇敢なる自警団の一員たる僕は菊池の為に惜しまざるを得ない。

尤も善良なる市民になることは、——兎に角苦心を要するものである。

芥川流の、韜晦に満ちた文章である。

まず前提を確認しておく、「大火の原因は〇〇〇〇〇〇〇さうだ」の伏せ字のところに入るのは、当時の朝鮮人への蔑称と、彼らによる放火を意味する語が入ると推測されている。「〇〇〇〇はボルシェヴィツキの手先ださうだ」の伏せ字も同様であろう。この文章は、朝鮮人の暴動の風説について芥川が直接的に述べているものなのである。

芥川龍之介が「善良なる市民」などのいかにも通俗的な道德に対して皮肉な視線を投げかけ続けた作家であったことはよく知られている。この年に限っても、たとえば「侏儒の言葉」の「修身¹⁸」という節では「道德は便宜の異名である。「左側通行」と似たものである」、「道德の与へたる恩恵は時間と労力との節約である。道德の与へる損害は完全なる良心の麻痺である」、「我我を支配する道德は資本主義に毒された封建時代の道德である。我我は殆ど損害の外に、何の恩恵にも浴して居ない」と、一般的な道德を積極的に揶揄する文章を連ねている。これを踏まえれば、引用した「大震雑記」の一節の「善良なる市民」の基本的な立場もすぐに理解できる。もし「信じられぬ」としても、「少くとも信じてゐるらしい顔つきを装はねばならぬ」もの、すなわち、「修身」の言葉で言えば、まさに「便宜」のために「良心の麻痺」を強いるものということになる。それは「恩恵」を与えはせず、「損害」ばかりを与えるものとされる。

この一節には、あり得る誤解、すなわち芥川が「善良なる市民」であるべきだと主張していると文字通りに解釈されることを防ごうとする、過剰なまでの留保が付されている。たとえばこの主張については「自説(?)」と疑問符が付され、また、「勿論」という言葉にも示されているように、菊池の反論に対してはすぐに撤回する用意があったように書かれている。従って、芥川は「大火の原因は〇〇〇〇〇〇〇さうだ」、「〇〇〇〇はボルシェヴィツキの手先ださうだ」と述べはしたものの、本心では当然そうではないと思っていた、ということがまずは読み取れる。

しかし、ここでの菊池の振る舞いと芥川の振る舞いは、少なくとも表面的には対照的なものである。菊池寛は風説に対して敢然と否定しているのに対し、芥川はあくまで「信じてゐるらしい顔つき」を装い、「善良なる市民」と同時に勇敢なる自警団の一員」として、周囲の動向に対して何一つ逆らわない方針をとっている。「大震雑記」のような文章によって、この表面的な振る舞いとは乖離した芥川の本心がようやく知れるわけだが、逆に言えば、芥川の本心が実は周囲の動向に対して批判的なものであるという理解は「大震雑記」によって初めて可能になるものでもある。

さらに言えば、芥川は当時朝鮮人の暴動を疑わず、自警団の活動に積極的に荷担したが、後で菊池寛に風説の誤りを指摘され、後から反省して、まるで当初から懐疑的であったかのように自らの振る舞いを糊塗するべくこの文章を書いている、という可能性さえある。「大震雑記」は、芥川の本心」を事後的に創作しているという解釈である。

たとえば「大火の原因は〇〇〇〇〇〇〇さうだ」、「何でも〇〇〇〇はボルシェヴィツキの手先ださうだ」という言葉を周囲の者に対して発するのは、風説の広がり積極的に荷担する者の振る舞いに他ならない。芥川はここで、何一つこの風説に対して懐疑を差し挟むことなく、伝言ゲームに参加していたのである。またこの文章からうかがえるのは、菊池寛の言葉を聞いて「ぢや」と消極的な撤回の言葉を返し、また「へええ」と意外そうな返事をするなど、すっかり信じていた者の

振る舞いを、どうやら芥川がしていたらしいことである。となると、この文章は全体として、菊池寛へのエクスキューズという性質を持っていることになるだろう。あのときは完全に風説を信じていたかのように振る舞ったが、あれは、信じていなかったとしてもそのように振る舞うのが「善良なる市民」と見なされるために必要なことだからであって、実は自分も風説には懐疑的であったし「善良なる市民」の振りをするのは「兎に角苦心を要する」ものだと自分でも思っているのだ——このようなメッセージである。

しかし、本当に芥川が「善良なる市民」であろうとしているならば当然、「大震雑記」のような、「善良なる市民」の観念に懐疑を差し挟む文章を書いてはならないはずである。また、「善良なる市民」の観念に反抗する覚悟が少しでもあるならば、それを表明すべきタイミングは何よりも「大火の原因は〇〇〇〇〇〇〇さうだ」、「何でも〇〇〇〇はボルシェヴィツキの手先ださうだ」という風説を前にしたときであったはずである。もちろん、出来事の渦中ではそれは難しく、少し落ち着いてからでなければ「大震雑記」のようなシニカルな態度を表明することはできなかった、ということはある得よう。しかしいずれにしても、「大震雑記」には、風説の拡大に自ら荷担した者が、その振る舞いについて後から言い訳を試みるような性質が見られるのである。

4 「或自警団員の言葉」における達観の装い

「侏儒の言葉」の「或自警団員の言葉」の節が、菊池寛が主宰する『文藝春秋』に掲載されたのは、「大震雑記」の翌月のことである。この号は、震災後の最初の号であり、2ヶ月の休刊を挟んだ、いわば復活号となる。そこで連載を持っていた芥川は、再び「自警団」の問題について触れずにはいられなかったようである。

この節の冒頭を確認してみよう。

さあ、自警の部署に就かう。今夜は星も木木の梢に涼しい光を放つてゐる。微風もそろそろ通ひ出したらしい。さあ、この籐の長椅子に寝ころび、この一本のマニラに火をつけ、夜もすがら気楽に警戒しよう。もし喉の渇いた時には水筒のウイスキーを傾ければ好い。幸ひまだポケットにはチョコレート棒も残つてゐる。

聴き給へ、高い木木の梢に何か寝鳥の騒いでゐるのを。鳥は今度の大地震にも困ると云ふことを知らないであらう。しかし我我人間は衣食住の便宜を失つた為にあらゆる苦痛を味はつてゐる。いや、衣食住どころではない。一杯のシトロンの飲めぬ為にも少なからぬ不自由を忍んでゐる。人間という二足の獣は何と云ふ情けない動物であらう。我我は文明を失つたが最後、それこそ風前の燈火のやうに覚束ない命を守らなければならぬ。見給へ。鳥はもう静かに寝入つてゐる。羽根蒲団や枕を知らぬ鳥は

鳥はもう静かに寝入つてゐる。夢も我我より安らかであらう。鳥は現在にのみ生きるものである。しかし我我人間は過去や未来にも生きなければならぬ。と云ふ意味は悔恨や憂慮の苦痛をも嘗めなければならぬ。殊に今度の大地震はどの位我我の未来の上へ寂しい暗黒を投げかけたであらう。東京を焼かれた我我は今日の餓に苦しみ乍ら、明日の餓にも苦しんでゐる。鳥は幸ひにこ

の苦痛を知らぬ、いや、鳥に限ったことではない。三世の苦痛を知るものは我我人間のあるばかりである。

この箇所が続くのが、本稿の冒頭で見た小泉八雲のエピソードとなる。この箇所は、「さあ、自警の部署に就かう」と自警団の活動についての話から開始されているが、自警団の活動をめぐる一般的なイメージとはかなり距離のある様子で描かれている点に注意したい。自警団とは、井戸に毒を入れたり放火を起こしたりと、多くの人命に関わる事件が社会主義者や朝鮮人によって起こされているという風聞に対応したものであった。それは、犯人の疑いのある存在を実際に殺してしまうような、きわめて緊張感の高い、殺気立ったものであった。対して、芥川の描く「自警団員」は、「寝ころび」ながら「マニラ」を吸い、「ウイスキー」を飲みながら「気楽」に努めればよいと考えているかのようである。この節の主人公たる「或自警団員」は、現実の自警団の活動から距離を取っていることがことさらに強調されているのである。「鳥」や、ここに続く小泉八雲らの「蝶」「蟻」のエピソードは、人間の活動を他の生物種と比較して考える、超越的な視点から眺める文脈で登場するということになるが、これはまさに、目前の事態から意識の上で距離を取ろうとする、この「或自警団員」の基本的な姿勢から来ている。人間とは何なのか、ということを変えて考え直す際に、最初に召喚される固有名が、小泉八雲なのである。

八雲と李白に続くショーペンハウエルの節の後半は、次のようになっている。

自然は唯冷然と我我の苦痛を眺めてゐる。我我は互に憐まなければならぬ。況や殺戮を喜ぶなどは、——尤も相手を絞め殺すことは議論に勝つよりも手軽である。

自警団員の言葉として登場する「相手を絞め殺す」というのは、朝鮮人虐殺のことを指すと見てよいだろう。これに対する「況や殺戮を喜ぶなどは」という言葉は、抑揚形によって強く批判する言葉である。しかしこの言葉は、最後まで言い切る前にダッシュによって途中で終わってしまう。そして「議論に勝つ」という比較対象が突如として持ち出されて、それに比べて「相手を絞め殺す」ことは「手軽」であることが述べられる。

この文章の流れは奇妙である。この結び方はまるで「相手を絞め殺す」ことによって困難の達成や優位を誇ろうとしている人物を揶揄するかのようなものとなっているわけだが、先の抑揚形の強い語調、「なければならぬ」というはっきりした主張の言葉からすれば、批判としては失速していると言わざるを得ない。

このすぐ後に、この節は「さあ、君はウイスキーを傾け給へ。僕は長椅子に寝ころんだままチョコレートの棒でも囓ることにしよう」と、気楽な様子で結ばれることになる。眼の前の虐殺を強く批判しなければならぬというベクトルと、達観した立場から気楽に振る舞うというベクトルが、奇妙に拮抗している章となっているのである。

このことは、「大震雑記」からの流れを踏まえれば理解できるのではないだろうか。すなわち、朝鮮人の虐殺を前にして全く懷疑を差し挟まなかった芥川が、菊池寛に論されて反省したが、当時

風説を全く疑わなかったという不明を恥じるのは格好がつかないと感じ、最初から疑ってはいたものの達観した立場にあったために積極的には異論を唱えなかったのだという説明を後からつけようとしている、という解釈である。単に言い訳を述べているのではなく、自警団の活動を事後的に何度も揶揄することによって、せめてもの罪滅ぼしを試みていると捉えることもできる。

だとすれば、これらの文章を書いたときの芥川は、心穏やかではなかったはずである。自ら風説の流布や自警団員の活動に荷担してしまったことを恥じ、強く批判されるべきことであると後から感じるも、その気持ちが強いものであるあまり、自らの非を認めることもできず、無理なごまかしをしなければならない状況にあった、ということになるからだ。達観した姿勢を示す文章は芥川にはいくつもあるが、その中でも「或自警団員の言葉」は特に甚だしいものである。このことさらな達観の装いは、かえって穏やかならぬ心境を反映したものであると考えられるのだ。

もちろん、芥川はここに書かれている通り、最初から達観して事態を眺めていたという解釈も可能ではあるだろう。しかし、震災直後、「大震雑記」に続けて「或自警団員の言葉」を書かずにはおられないところ、すなわち自警団の問題に繰り返し言及しなければならないと感じたらしいことを考えれば、前者の解釈の方が自然なようにも思われる。

また、前述したように、文章の随所に見られる言動の矛盾も、それを指し示しているように見える。「或自警団員の言葉」は、芥川自身の意向に従って単行本化時に削除されることになるが、それはこの文章が、矛盾を隠しきれない、かえって体裁の悪いものであると芥川自身が後になって感じたことを表していると考えられる。あるいは、小泉八雲や李白のエピソードについて不正確であったことを後から顧みたということもあるかもしれない。

5 人間と動物

以上のような解釈は、自警団に荷担した芥川を非難するために検討しているのではない。これらの芥川の文章は、ある種の弥縫の意図を含むものであるにしても、むしろ一つの良心の形を示していると見るべきだろう。ただ、ここで重要なのは芥川自身の評価の問題ではなく、こうした微妙な文脈において小泉八雲が召還されることの意味である。

より詳しく見ていくことにしよう。小泉八雲、李白、ショーペンハウエルの名前はここで、同様のエピソード群として並列に挙げられているわけではない。ここで挙げられたエピソードでは、小泉八雲は「人間よりも蝶になりたい」と考え、李白は逆に「無数の蟻の群を憐んだ」とされている。つまり、八雲が昆虫の生を人間の生よりも望ましいものと考えたのとは逆に、李白は人間の生を昆虫よりも望ましいものと考えたというのである。ショーペンハウエルのエピソードは「まあ、哲学はやめにし給へ」と内容が語られる前に中断されているので想像するよりないが、「しかし」と接続されているように、李白のエピソードとは逆の立場、すなわち小泉八雲と同様に、昆虫の生を人間の生よりも望ましいものと見たというエピソードが紹介されつつあったということが分かる。

つまりここでは、人間の生と他の動物の生のいずれが幸せかという問いが検討されている。この前の部分で、鳥は人間の苦痛を感じなくて済むが人間の快樂も知ることができないということが述

べられていて、この問題について、鳥から他の動物に例を広げて著名な偉人のエピソードを参照しながら両方の立場を交互に考えるというのが、この段落なのである。

この思考を経て最終的に出される結論は、「我我は兎に角あそこへ来た蟻と大差のないことだけは確かである」というものであった。動物と人間が違うことを前提とした思考を辿った末の結論としては、「大差のないことだけは確か」というのはやや飛躍を含んでいる。その飛躍を補うとすれば、動物の、人間の快樂を知ることができないという負の側面と、苦痛を感じずに済むという正の側面は、いずれを重要と見ることも可能であり、相殺すれば「大差」ないと考えることもできる、ということになるだろうか。

この結論に続くのは「もしそれだけでも確かだとすれば、人間らしい感情の全部は一層大切にしなければならぬ」という文章だが、これも飛躍を含む逆説的な表現である。動物と人間は「大差」ないからこそ、そのわずかな「差」である「人間らしい感情の全部」は貴重なものとして「大切にしなければならぬ」というわけだ。

「殺戮」や「相手を絞め殺すこと」を批判する言葉は、この「人間らしい感情」を立脚点として語られることになる。つまり、ことさらな達観の身振りや、動物と人間の比較の繰り返し、飛躍や逆説を重ねることは、このための準備として述べられていたのである。これらによって、芥川ははじめてこの批判の言葉に辿り着くことができた。しかし、辿り着いた瞬間に、「尤も相手を絞め殺すことは議論に勝つよりも手軽である」と、少し異なる方向の揶揄へとずれざるを得なかった芥川の自意識は、先に確認した通りである。一見迂遠な論理を示すことなしにストレートにそれを語ることができなかったのは、芥川が自警団の活動を目前にしたとき、それを疑い冷静にさせるような振る舞いを取れなかったことの負い目によるものであろう。芥川の達観した表情の奥には、苦渋に満ちた表情が透けて見えるのである。

鳥や蝶や蟻は、芥川が自らも参加しているはずの人間の営みから一旦距離を取り、言葉を紡ぎ直すために必要とされたものであった。その際、動物の生から人間の生を相対化する視点を示した代表的な人物として捉えられていたのが、小泉八雲であった。八雲と比較してみるならば、李白は人間中心主義的な立場であり、ショーペンハウエルは、名前だけ挙げられるが具体的なエピソードは想起されずに終わっている。ほんの一文であり、些細な例示のようにも見えるが、実質的には、八雲が最も重要な固有名として挙げられているのである。

小泉八雲が昆虫に関心を示し、東洋の昆虫観を、人生観と関わる独特なものとして盛んに西洋に紹介したことはよく知られている。しかし、それは西洋のみならず、日本においても再解釈され、この芥川の例のように、人間の営みを改めて捉え直す際に想起されるものとなっていた。その受容過程の解明ははまだ端緒に就いたばかりだが、重要な比較文化的課題として我々の眼の前に存在している。

注

- 1 芥川龍之介「侏儒の言葉」(『文藝春秋』大正 12 年 1 月～大正 14 年 11 月)
- 2 芥川龍之介「或自警団員の言葉」(「侏儒の言葉」『文藝春秋』大正 12 年 11 月)
- 3 芥川龍之介『侏儒の言葉』(文藝春秋社出版部、昭和 2 年 12 月)
- 4 全集などには単行本未収録の文章も掲載されているものもあったが、その他の流布本を読む一般読者のことを指している。
- 5 『芥川龍之介全集』(筑摩書房、昭和 33 年)。ただし、これをもとにしたとされる後述の昭和 46 年版全集は確認しているが、こちらは未見。
- 6 『近代文学注釈大系 芥川龍之介』(有精堂、昭和 38 年 5 月)
- 7 『現代日本文学館 20 芥川龍之介』(文芸春秋、昭和 41 年 6 月)
- 8 芥川龍之介『羅生門・鼻・侏儒の言葉』(旺文社文庫、昭和 41 年 6 月)
- 9 芥川龍之介『侏儒の言葉・西方の人』(新潮文庫、昭和 43 年 11 月)
- 10 『日本近代文学大系第 38 卷芥川龍之介集』(角川書店、昭和 45 年 2 月)
- 11 『芥川龍之介全集 第五卷』(筑摩書房、昭和 46 年 7 月)
- 12 芥川龍之介『侏儒の言葉・西方の人』(新潮文庫、平成 7 年 9 月)
- 13 『芥川龍之介全集 第十三卷』(岩波書店、平成 8 年 11 月)
- 14 Lafcadio Hearn, *KOTTO*, The Macmillan Company, 1902
- 15 『小泉八雲作品集 第十卷』(恒文社、昭和 39 年)
- 16 芥川龍之介『侏儒の言葉』(文春文庫、平成 26 年 7 月)
- 17 芥川龍之介「大震雑記」(『中央公論』大正 12 年 10 月)